

第五章 習わしと伝説

第一節 古い習わし

一 一生の儀礼

冠婚葬祭の習わしは、それぞれの地域で、古くから長い伝統として受けつがれてきている。それらの習わしは、世の推移につれて廃絶したものが多く、とくに戦後から昭和三〇年代のころにそれが著しい。

そのころから暮らしの態様が急変し、古くからの伝承も形式だけになったり、いつとなく行われなくなつたものも多い。

本章では、いちおう昭和初期ごろまでさかのぼり、当時の姿をたどつてみることにした。

現在の出産は、ほとんど病院か産院であるが、昭和三〇年代ごろまでは自宅での出産がふつうだった。

産婆さん（助産婦）が取りあげるようになるのは、明治末期から大正初期ごろからのようで、それ以前は出産経験の多い近所の老女などが取りあげていたという。

出産には苦痛がともなう。妊婦は出産のさいに、「青竹をツミシヤグ（握りつぶす）」ほどにならねば子は生まれないと、いい聞かされた。

妊婦の食べものも、昭和初期のころまでは、あれこれ食べてわるいといわれるものばかりで、お菜は味噌漬しか梅干が多かった。

帯祝い

妊婦は妊娠五カ月目の「戌いぬの日」に腹帯を巻き、「帯祝い」をする。犬は産が軽くて育ちがよいので、あやかつてこの日を選ぶようになったという。

腹帯は岩田帯ともいい、八尺の白もめんを嫁方から贈る。帯祝いには、嫁の実家の母親と産婆、仲立人などを

よぶ。

出産

お産は納戸でするのが普通だった。納戸の畳を一枚あげてゴザやぼろ布をひろげて産室にした。

腹がせき始める（陣痛が始まる）と、産婆を呼びにいく。大きな鍋などをかまどにかけて、うぶ湯の用意をする。産婆が遠いときは、着くまえに生まれてしまうこともあった。男は、出産のとき家にいるものではないとされ、外に出された。

明治のころまでは、ヘソの緒を、茶碗のかけらの角で押し切ったともいう。

後産は、つばか古いどびんに入れて納戸の床下にイケ（埋め）た。

うぶ飯

子どもが生まれると、すぐにうぶ飯をたき、近所の主婦たちをよんでウブママを食べる。

「ヤヤ（赤ん坊）が生まれたき、ご飯食べにきておくれ」といって招き、飯に豆腐汁、焼き魚（塩鰯）ほどの料理をだす。豆腐汁にはかならずイモガラを入れた。イモガラにはあくがあつて、産婦の毒消しになり、産後によい

とされた。

神さまに供えるうぶ飯には、丸い小石をのせていたという。

名つけ祝

生まれて七日目のお七夜は、ヒトシチャともいった。この日に名前をつけ、夜は仲立人や、嫁の実家の両親をよんで祝いをする。

命名した子の名前は、紙に筆で大きく書いて長押や神棚などにはつておく。

産婦が床を離れるのは、ふつうお七夜がすんでからであるが、農繁期などには、そんなに休めなかったという。お産を不浄としていたで、産後に炊事をはじめるときは、クド（かまど）に塩をまいて清め、風呂をたくにもそうした。

宮参り

宮参りは、「日があく」のを待つてする。「日があく」というのは、忌み明けて、男児は三十一日、女児は三十三日である。女児の方が二日遅いのは、それだけ業が深いとされたから。

宮参りには、嫁の実家から贈られた産着（うぶぎ）を子どもの掛

け着物にする。

しゅうとめが子どもを抱き、産婦はついていき、大原神社でおはらいをしてもらう。

百日ももか

子どもが生まれて百日目の祝い。餅をつくか、赤飯を蒸して、仲立人、親類、産婆などに配る。

初正月

嫁の実家から、長男には破魔弓、長女には押絵のついた羽子板を贈る。破魔弓、羽子板は長押ながしに飾っておく。

正月すぎには、嫁の両親や仲立人をよんで祝宴をする。これを破魔弓タオシ、羽子板タオシといった。

初誕生

最初の誕生日には、餅をについて初正月を祝ってくれたところにひと重ねを配る。

また、子どもにわら草履をはかせ、ひと重ねの餅を風呂敷に包んでかるわせ(背負わせ)て歩かせる。このとき、上手に歩くと突き倒したりした。倒すのは、上手に歩く子は親から早く離れるとしたことによるらしい。

初節句

旧暦三月三日に女兒の初節句をする。ふつう長女の場合

合だけで、嫁の実家からはヒナサマ(ヒナリサマといった)を贈る。

白餅とフツ(よもぎ)餅をつき、菱餅をヒナサマに供える。嫁の実家や親類、仲立人には、餅に桃の花の小枝をそえて配る。

近所の主婦たちに、「ヒナリサマ見においてちおくれ」といってよび、お茶のみをする。桃の節句には、チモトマゲや千切り大根の酢あえが付きものだった。

男児の初節句は旧暦五月五日で、これも長男のときだけである。嫁の実家から勇壮な武者絵を描いた幟のぼりが贈られ、親類からも鯉のぼりが贈られる。

初節句を祝ってくれた嫁の実家や親類には、返礼にチマキ、カシワ餅を配る。

ヒボトキ(紐解き)

男児、女兒とも、数え年三歳の旧暦十一月一日に大原神社に参り、ヒボトキ祝いをする。嫁の実家から着物が贈られ、親類は履物など贈ったりする。

贈られる着物は、男児には紋付き、女兒には振り袖と帯が多いが、受ける方の希望で洋服にする場合もある。

祝ってくれた人には、餅をについてひと重ねを配り、ま

た、ヒボトキ祝いに招く。

ヘコカキ・ハモジカキ

男児、女兒とも数え年七歳の祝い。旧暦六月一日に、男児はヘコ（ふんどし）をかき、女兒はハモジ（腰巻き）を巻いて大原神社に参る。

ヘコには「金時ベコ」や「桃太郎ベコ」があり、前にたらず部分に絵が染めぬいてある。ハモジは赤や桃色などが多かった。

祝いのヘコやハモジは、母親の実家や親類が贈り、また、この日に親類や知人に赤飯を配り、祝宴をした。

2 結婚のしきたり

結婚のしきたりも、時代とともに大きく変わってきている。いまは普通になった恋愛結婚も、終戦のころまではきわめて少なく、若者どうしの愛情よりも、決定権をもつ親が、家の釣りあいの方を重視して相手を選んだ。

縁談にさいしては、双方、相手の家柄、財産、家族構成から、人柄、健康、仕事ぶりなどを近所で聴くなどして調べ合った。

戦後になると、結婚式の形も大きく変わってくる。それまでの結婚式は、ほとんど自宅で行われていた。

戦後になって、新生活運動の一環として提唱された「公民館結婚」が昭和二九年から行われ、これの普及によって、両家の「出合い」による挙式が一般化してくる。

本章では、昭和一〇年代ごろまでの結婚の姿を追ってみる。

嫁女見よめじよみ

適当な娘がいると、婿方むこの親か親しい人が下調べにいく。カゲミといい、ベベノコ（子牛）を見にいくなど、ほかの用にかこつけて、それとなく見にいった。

娘の家でも、それとわかって娘にお茶をくませたりした。

嫁女もらい

カゲミをして意にかなえば、仲立人が酒一升と鯛一尾をもって嫁をもらいにゆく。

持参の品を受取れば同意したことになるので、嫁方では簡単には受取らず、日を改めて二度、三度と回を重ねることもある。

話ができれば、持参の鯛を料理して酒宴となる。このとき双方であいさつを交わし、縁談が正式に決定する。

あとからクギチャを贈る。

日ひにち々ぎめ

吉日を選んで、婿方から仲立人と、親か、親族の者が酒肴を持って嫁の家にゆく。

嫁方の仲立人も同席して、祝言しゅうげんの日取りや着物買いにどについて、それぞれ話しあつて決める。

結納

祝言の一〇日か二〇日ぐらい前、吉日を選んで仲立人夫婦が結納を届ける。結納金という形が、たまに見られるようになるのは、昭和初期ごろからのようで、一般には着物を贈るのが普通だった。

「祝言着物しゅうげんぎもん」といい、嫁がわの仲立人と嫁と母、婿方の親が双方いっしょに買いに行く。祝言着物は、久留みや博多まで買いにでかけることも多かった。

カネツケ

カネツケはオハグロともいい、明治のころまで既婚者は眉をそり、歯を黒く染める風習があった。

これに由来して嫁入りの数日まえ、嫁の友だちや、近

所の主婦などを招いての別れの宴をカネツケと呼んだ。

この宴に用いるカネツケ酒は、婿方から贈った。

荷取り

嫁入りのまえに、婿方から嫁の荷（たんす・長持・鏡台・ふとん・たらい・針箱など）をうけ取りにゆく。荷取りの責任者を荷宰領にざいりょうといい、近所の若い者を数人連れてゆく。

嫁の家で祝い膳ぜんがでて、荷宰領が小謡「鞍馬天狗」をうたう。

たんす・長持などの荷は、にない棒でかついて運んだ。のちには、リヤカーや馬車で運ぶようになる。

ムコイリ（嫁迎え）

嫁入りの当日、婿方から嫁方へ迎えに行くのをムコイリといい、婿のほか、仲立人、ムコマギラカシ、近親者などが同行した。

ムコマギラカシには、ふつう親類の同年輩の者がなつた。嫁方の祝い膳（みたての膳）の途中に、婿とムコマギラカシは抜けだして、逃げるようにして帰る。これをムコニゲといった。

嫁入り

嫁は母親につれられて近所をイトマゴイに回る。その

あと、仏壇に参ってから両親にあいさつし、別れをつける。

家をでるときは、戸口まであとずさり出る。嫁には、仲立人夫婦、父親、兄弟姉妹やその配偶者、オジ、オバ、アリツケオナゴ、ヨメジヨマギラカシなどが付いてゆく。アリツケオナゴは、嫁のオバなどの年輩者で、嫁を婚家に落ちつかせるため、ミツメアルキまで婿方にとどまった。

中宿

嫁の一行は、中宿という婿方の近くの家に入って休息する。中宿に入る道と、中宿をでて婿方へ向かう道は、同じ道筋になるのを避けて別道を通る。

遠方からのときは、中宿で道中着から挙式の着物に着替える。

このころ、婿方では前座の宴席がつづいている。婿方から用意が整ったとの知らせをうけて先方へ向かうころは、もう夜も更けている。

祝言

嫁は戸口で迎えられ、オテヒキに手を引かれて家に入る。オテヒキは小学校低学年ぐらいの童女がつとめ、家

に入るときは、右手に米三合三勺を入れた一升きん枘を持ち、左手で嫁の手を引く。嫁は座敷に案内され、仏壇に参って座につく。

挙式は、深夜の一二時ぐらいになるが普通だった。

座敷で式をあげ、婿方の仲立人が杯をさせる。三三九度の杯は、両親のそろっている一〇歳前後の男女児（雄蝶雌蝶）が酌をし、ウタイテが謡三番（高砂・四海波・長生の家）をうたう。

夫婦杯みょうとのあと、親子・兄弟の固めの杯がつづき、さらに婿、嫁双方の父親がお互いに型通りのあいさつを交わす。

杯は正客へ回され、次々に下座へと回る。

このあと、会席膳がだされ、祝宴にうつる。宴は夜明してつづけられ、夜が明けても雨戸を開けずにもてなしをつづける。

「千秋楽」の謡がでると宴が終わる。

最後に、新婦は客に帰りを促す意をこめた茶をくみ、これをイネチャといった。客が座をたつてはきものをはき、家をでるころに茶吞茶わんでワラジ酒をだす。

嫁女回り

祝言の翌日、しゅうとめが嫁を連れて、近所や親類、世話になった人などにあいさつ回りをする。嫁の髪型は、前日の高島田からマルマゲに変わっている。

見知りあい

嫁を近所の人を紹介するため、近くの主婦をよんでお茶入れをする。これを「見知りあい」といい、二日目の昼におこなう。

樽客

二日目の夜に、婿の友人や知人をよんでの宴を、樽客または樽という。招待された人は^{はなむけ}膳の品と樽料を包んでゆく。

ミツメアルキ

嫁入り三日目に、新郎新婦は両親といっしょに、嫁の実家にあいさつにゆく。ミツメアルキという。このとき、嫁の家には泊まらず、日帰りするものとされた。

初正月

結婚後の初めての正月には、鏡餅ひと重ねを持って嫁の実家にゆく。仲立人をよんで祝いをすることもある。暮れには、婿の家から嫁の実家にブリ一尾を届ける。

ブリは、仲立人にも贈るところが多い。

3 通過儀礼

厄年

男女とも「厄入り」の年の旧暦六月一日に大原神社に参り、「厄除け」の祈願をする。

男は数え年の二五歳と四二歳、女は一九歳と三三歳である。翌年の「厄晴れ」にもお礼参りをする。「厄入り」には、親類や知人に赤飯を配って厄祝いをする。

還暦

男女とも数え年の六一歳で還暦を祝う。子どもたちから、赤へこ、赤のチャンチャンコが贈られる。

ほかにも、次の祝いがある。

七〇歳（古稀^{こき}）

七七歳（喜寿^{きじゅ}）

八〇歳（傘寿^{さんじゅ}）

八八歳（米寿^{まいじゅ}）

九〇歳（卒寿^{そっじゅ}）

九九歳（白寿^{はくじゅ}）

喜寿の祝いなどには、男は斗棒^{ヒゴ}、女は鯨尺を親類や知人に配る。

4 葬送の風習

昨今の葬儀は、ほとんど葬儀社などによって執り行われるようになった。また、臨終を病院で迎え、遺体で帰宅することが普通になると、その態様が大きく変わってきている。そのため、古くから受けつがれてきた葬送にさいしての風習も、行われなくなっているものも多い。

葬儀のことを「野辺の送り」というのは、死者を野辺の墓地まで見送り、埋葬することに由来している。

照妙寺ご住職の話によると、そうした「野辺の送り」（土葬）は、昭和二〇年ごろまで、たまに行われていたという。

三花村（財津）に村営の火葬場が設けられたのは、昭和六年ごろのようだ。それ以前は、京塔（渡里）の火葬場を使ったという。

もともと土葬が多く、火葬は伝染病の場合などに限ら

れていたようだ。いつごろから火葬が行われるようになったか、はつきりしないが、昭和六年に村営の火葬場ができたのは、その必要度が高くなったからであろう。以下、むかしの葬送のあらましを述べる。

枕直し

臨終のさいに、末期の水をふくませる。遺体を北枕に寝かせて、胸の上に手を合わせる。顔を白布で覆い、死者の着物をふとんの上に逆さに掛ける。刃物（カマナタ）を魔除けにふとんの上に置く。

枕もとは一本花（マサキ）、一本線香をたて、燈明をつける。神だなは白扇を逆さにして覆っておく。

早御仏供^{はやおぶく}

早御仏供は、余らぬように炊いて茶わんに盛り、一本書をたてて枕もとに置く。組内の人が米三合ほどを持って頼み寺に知らせ、住職に葬式のことを頼む。

悔み・葬式準備

死人がでると、すぐに組内（講組）に知らせる。親類、知人、近所の人は悔みにゆく。組内の人たちは役場に死亡届をし、呼び状（非時案内）を書き、手分けしてふた

りずつ組んで配りにゆく。

このほか葬式の日には、男は棺、六道、ハス花、シカバナ、タイマツなどを作り、女はお齋膳（とき）の用意をする。

土葬のときは、講組の男は墓地で埋葬の穴を掘る。

「たて棺」だったので、穴の深さは一間（一・ハメートル）以上ほども掘ったという。穴掘りは多くの人手が要るので、別の講組が担当するところもあった。

夜伽（通夜）

親類や、生前親しかった人、組内の人は夜伽に参る。僧侶の読経とお説教がある。むかしは、近所の人も一二時近くまで夜伽をした。

夜半になるので夜食や酒をだす。あとは近親者だけで、だれか必ず起きていて線香と燈明をたやさない。

湯灌（ゆかん）

納戸の畳をあげて、竹を編んだサナを敷き、大きなタライを置いてする。近親者が遺体を起こしてタライの湯（水に湯を入れてうめる）で体を洗う。湯をかけるときは、ヒシヤクを逆手で持つ。周りの人は線香をもって、ナムアミダブツを唱える。

濡れた体はふかず、湯は床下に捨てる。

納棺

死者の頭髮を、近親者がそれぞれカミソリで少しずつ剃る。三角布を額につけて顔にたらし、白衣（シロムク）を左胸に着せ、紐（ひも）はたてむすびにする。合掌させた手には数珠をかける。手甲、脚絆（きゃはん）・足袋をつけ、ズダ袋を首にかけて、立て膝の形で棺におさめる。

棺には、眼鏡など生前愛用したものを入れることもある。夫を亡くしたとき、妻は髪を切って入れるので、茶せん髪を結うことになる。

葬式のお斎（とき）

葬式の前に、近くの家でお斎をする。むかしは自宅ですることが多かった。

献立は、アブラゲの煮つけ（ヒラ）、椎茸（しいたけ）・麴（かぶ）・コンニャクなどの煮もの（ツボ）、酢あえ・みそ汁、飯などが普通である。

葬式・出棺

葬式はたいいてい死亡の日の翌日であるが、友引などの都合で、三日目になることもある。

むかしの葬式は、ツボ（庭）でするのが普通だった。身近な女の人は精進髪を結び、被衣（かつぎ）や綿帽子をかぶった

という。

親類や知人は、供物をあげる。親の場合には、子は敷米として米一俵をあげるものとされた。

大正の初期ごろまでは、三尺ほどのキンランの旗をあげ、のち新モスの青、黄、紫など八尺から一丈の旗になる。旗は竹竿につるした。

僧侶が棺のふたをとり、オコゾリをし、法名を入れる。僧侶の読経、焼香のあと、近親の者から順に焼香する。出棺のまえに、近親の者が石ころを使つて棺のふたの釘を次つぎに打つ。

棺を担ぐのは最も身ぢかな者で、額に三角布をつけ、前後四人で担ぐ。戸口からは出らずに、あとずさりて座敷の縁などから出る。

棺が家を出るとき、死者がふだん使っていた飯茶わんを投げて割る。

棺は葬列を組んで墓地へ向かう。墓地での埋葬は、僧侶の読経が終わつて棺を丁重に西向きに穴の中におろし、近親の者から順に土をかける。あとは組内の人か土を入れて盛りあげ、その上で紙花などを燃やす。

骨拾い

火葬のときは、火葬場で骨を拾う。木箸と竹箸で、まづノドボトケを拾い、順次二人以上ではさみあつて骨つばに納める。

お寺参り

埋葬の翌日、近親者は川石を拾つてきて仮墓たてをする。フゴやモツコを持つて川原へ行き、小石と墓ぼうずを拾う。ぼうず石を拾うとき、これと決めて手をかけたら、迷つて取り替へてはならないとされた。

墓は、土を盛つた上に墓ぼうず石を墓石にし、その周りに小石四八個を敷きつめる。

このあと、近親者と主な親類はお寺参りをする。お寺では、故人の打覆い着物（紋付きなど）、数米、旗、お布施を供えてお礼を述べ、お経があがる。

七日寄り・四九日

死去の日から七日目に、七日寄りをする。僧侶に読経を頼んで法要し、親類、知人、近所の人を精進料理でもてなす。

あとも、なななのか七七日（四九日）まで、七日ごとに僧を迎えて法要する。七七日は、とくにシジュウクンチと呼ぶ。

親類、知人、近所の人をお茶入れに呼んで精進料理でもてなし、故人をしのぶ。

喪家では、この日まで肉類や魚、イリコも食べずに精進をする。男はひげを剃らなかつたともいう。四九日が三月目にかかるときは、三五日にする。四九日が終つて、精進あげをする。

百力日

百日目の日をヒヤツカニチと呼び、法要をして近所の人にお茶入れをする。

初盆

喪家が初めて迎える盆で、精霊さまを旧暦七月一三日に迎え、一五日に送る。仏前には燈籠をともして祭り、親類や知人、近所の人が参る。親類は、燈籠、線香、ロウソク、そうめんなどをあげる。

初盆の客には、棒ダラを使った精進料理で接待する。一三日の夜には、集落の人が集まつて庭で供養の盆踊りをする。

年忌法要

一周忌、三年、七年、一三年、一七年、二五年、三三年、五〇年の各年忌には法事をする。親類は餅か饅頭、それ

に御仏前をつつみ、ころもがえ衣更一反を持って参る。

二 懐かしい年中行事

地域の長い伝統としてつづけられてきた年中行事は、戦後になって大きく変わってくる。

わが国で太陽暦（新暦）が採用されたのは明治五年（一八七二）であるが、日田では正月や盆、節句など年中行事のほとんどは、むかしのまま、太陰暦（旧暦）でつづけられていた。

戦後になり、生活の合理化を目指した新生活運動がすすめられるなかで、昭和三年の新年から、正月がまず新暦に統一される。

盆については、旧暦でない月が出てなくて暗くて不便だ、などといわれていたが、二年あとの昭和四年から、新暦八月一三日～一五日で行うことになった。

節句やヒボトキなどの行事も、このころから次第に新暦に移ってくる。

本章でとりあげた年中行事は、昭和初期ごろまでの姿をとらえたもので、月日の記述はすべて旧暦である。

正月の用意

まず、家の内外のスストリがある。また、正月の雑煮用の箸^{はし}として、クリヘイ箸も暮れに用意する。栗の新枝八寸（約二四センチ）ほどに切って、両端の皮をそいでつくった。

スストリや、雑煮用の箸かきは、暮れの一二日にするものとされていたらしい。

正月の餅つきをトシトリといい、暮れの二五日ごろからつく。丑^{うし}の日は火が荒れるとされ、この日は避けた。

つきたての餅をちぎって、アズキあんをまぶしたテヌクメを必ずつくり、これを食べると、ひとつ年をとるとされた。トシトリの膳^{ぜん}には、家族みんなに鰯^{いわし}など尾頭つきの魚がつく。

集落ごとの氏神さまの宮座（祭座）では、しめ縄づくり、門松たてをする。

年の夜

お飾り餅は、神だな、仏壇のほか農器具や牛馬の馬屋^{まや}にも飾る。神だなにお神酒をあげ、お膳には、数の子、田作り、牛蒡炒^{ごんぼい}り、ぬた、煮しめなどが並び、運そばを食べる。

年の夜の飯は、正月に持ちこすように大目にたき、「ふる飯」として牛馬にもえさにまぜて与え、年とりをさせる。牛馬には、明けてからの「若飯」も与える。

元日

元日はゆっくり寝て、早くは起きない。福の神が逃げないように、雨戸も早くは開けず、掃除もしない。

男がくると縁起がよいとされ、男の子が朝早く「おめでとう」といって回ってくるので、ミカンやスルメを与えた。

数の子、田作りなどでお神酒をいただき、雑煮を食べ、正月を祝う。

仕事起こし

二日は朝から仕事起こしをする。伏木では、生木^{なまき}を伐ってきて、田植どきの薪にした。これを「若木伐り」と呼ぶ地区もある。

早朝から山にゆき、カシなどの雑木を伐ってくる。伐るとき鉈^{なた}の刃を、その年の干支^{えと}の方向（子年であれば北）に向けてはならないとされた。

鍛冶屋^{かじや}でも仕事起こしをし、客にぜんざいを振舞うので、この日の朝にわざわざ、何か注文にゆく人もあった。

女は針起こしの裁縫をし、子どもたちは墨をすって書初めをする。

元日にはご飯はたかないので、二日の朝にたくご飯が「若飯」である。また、朝風呂（若湯）を沸かして入った。

福刈り

用松では、四日の朝に薪にする生木を伐りにゆき、これを「福刈り」といった。薪を採るのとあわせて、ススキの穂に止まっているという「福」を刈ってくる。薪は一荷^かだけとされ、それ以上は採らない。

刈ってきたススキの穂は荒神さまに供え、薪は縁起をかついで、田植えの日の朝に焚いた。

七草粥^{がひ}（七草雑炊）

七日の朝は、七草を入れた粥をたく。セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベ・ホトケノザ・スズナ（かぶ）・スズシロ（大根）が春の七草だが、全部はそろわないので、野菜も入れて七種類あわせる。

ナズナを入れるとよいとされ、好まれた。

道具ない

一日が「道具ない」で、その年に使う牛馬用具をこの日につくった。牛馬の使役に必要なシリゲー（尻がい）・

ムナゲー（胸がい）などで、材料はシュロ・苧^お・へらなどを使う。

この日は鏡開きで、商いをする家では「帳祝い」をした。

山神祭り

正月一六日は山の神の日。この日、山で目でも突いたら失明するといわれ、山仕事をしてはならない日とされた。

もぐら打ち

一日の朝には、子どもたちがもぐら打ちをする。篠竹のさきに藁^{わら}ぼてを縄でくくりつけたものを使い、「もぐら打ちや一四ッ日、アズキ飯^{めし}や一五ッ日」と、大声ではやしながら、ボトン、ボトンと家のまわりの地面を打って回る。これで、もぐらがこなくなるという。

すんだら、使った篠竹を折って柿の木の枝に掛けると、よく実がなるといわれた。

粥^{かいだめ}試し

一月一五日は、アズキ飯に餅を入れてたく。ダングラガイ（粥）ともいった。

長さ数センチに切った篠竹に、それぞれ作物・家族・

牛馬などの記号（文字や鋸目の数で表す）をいれ、これを飯にたきこむ。

たきあがつて、飯を神棚に供えたあと篠竹を割り、飯つぶやアズキの詰まり具合で作物の豊凶や、家族の運勢を占った。

初午^{はつま}

二月最初の午^{うま}の日が初午である。子どもたちは、色紙を長くついで、「奉納 正一位稲荷大明神」と大書し、氏名も書き、篠竹につるして近くの稲荷社のわきに立てて奉納した。

城山（月隈）の稲荷さまがにぎわい、オコシゴメ（おこし）を売る店が並んだ。

庚申さま^{こうしん}

庚申（かのえさる）の日は、六一日目に巡ってくるので、年に六回庚申さまを祭る。三花地区でも、すべての町内に古くから猿田彦大神（庚申さま）が祭られている。

庚申講は、戦後に廃絶した地区が多いが、三花ではいまでも講がつづいていいる地区もある。

庚申の日、輪番で座元が回ってくると、ダゴ（丸い米の粉団子）・アズキ飯・煮しめなどをこしらえ、重箱につ

めて地区の庚申さまに供える。夜、座元の家では床の間に庚申の軸をかけ、お神酒やダゴなどを供える。

集まった講組の人たちは、まず庚申さまに参ってからあいさつを交わし、お神酒銭（三百円位）を出したあと、座についてオミキアゲをする。

庚申講は、作の神への豊作祈願であるが、いまでは親睦会的な性格が強くなっている。

ひなさま

三月三日の桃の節句で、むかしはヒナリサマと呼んだ。飾ったひなさまには、菱餅（白餅とよもぎ餅）を供える。

農村でもひな人形を飾るようになるのは、明治時代になつてからという。

ひなさまは、明治期には焼物の泥人形で、大正期ごろから「おきあげ」に替った。「おきあげ」は、歌舞伎場面などの押絵の人形で、竹の足を台の穴にさして立てる。内裏^{びな}雛になるのは昭和の初めからというが、三花では昭和一〇年代まで、「おきあげ」を初節句に贈っていたようだ。

ひなさまは、嫁の実家や、親類、知人が贈る。贈ってくれた家には、餅に桃の花の小枝をそえて配る。

お大師さま

三月二一日と七月二一日（現在は四月と八月の二一日）に、集落ごとにお大師さまを祭り、「お接待」をする。

アズキ飯か、アブラゲ飯に煮しめがつき、木皿のオテシヨに盛ってだす。

五月の節句

五月五日の男の子の節句には、チマキ、カシワ餅をつくる。家の軒先の三カ所に、魔除けとしてシヨウブ・フツ（よもぎ）・ギシバント（ギシギシ）の束をさしていた。

長男の生まれた家には、嫁の実家や親類から武者幟^{のぼり}や鯉幟を贈って祝う。受けた家では、返礼にチマキ、カシワ餅を配る。

チマキは地域で異なり、ヨシの葉も使うが、クマザサで巻くところが多い。カシワ餅はサンキラ（山帰来）の葉で包む。

川祭り（さるまんじゅう申鰻頭）

六月の初申^{さる}の日に、サルマンジユウを作って供え、水難除けの川祭りをした。

羽野や用松では、セタに使うような笹竹に、サルマンジユウを数個、竹の皮に包んでつるす。ほかに塩鯖の頭、

オミキスズ（笹竹の筒で作ったお神酒入れ）もつるし、これを川岸に立てて供える。マンジユウは、エンドウあんが多かった。

供え方はいろいろで、マンジユウを小麦^{から}稈に包み、これを棒につるして川岸や汲^{くみ}場の石垣にさして供えるところもあった。

『豊西記』には、応安七年（一三七四）日田鶴熊丸が筑後国馬渡で溺死し、その怨念が万民六畜を悩ませたので、申若大明神として祀^{まつ}ったとも記されている。

サルマンジユウを供える川祭りは、三花地区では昭和二〇年ごろまで行われたようだ。

風止め^{かざどめ}

稲の穂ばらみ期には、台風の襲来が多い。立春から数えて二一〇日目、二二〇日目のころに多いので、農民は二百十日、二百二十日を厄日として恐れた。

風止めは、風害のないことを祈る風鎮祭で、清水町の八幡さま（笹森神社）では、土用に入った三日目（現在は新暦七月下旬の日曜）に神官を迎えて風止めの祈願をし、オミキアゲをする。

オンバレ(おなばれ) (大祓)

六月末日（現在は新暦七月末日）はオンバレで、集落の八幡さまで神事があり、お籠りなどの行事がある。昭和二〇年代ごろまでは、粟の穂を持って大原八幡社に参った。

オンバレは、かつて大晦日と六月晦日の年二回、身の不浄を祓はらい災いを防ぐために、宮中や神社で行われた大祓に由来している。

七夕たなばた

七月七日は七夕を祝う。前日の六日の朝、朝日のあがらぬうちに里芋の葉にたまった露を集めて墨をすり、色紙の短冊に字を書いて笹竹につける。

お神酒・七タマンジュウ・野菜などを供えて祭り、短冊をつけた笹は七日の早朝、川岸に持ちだして立てる。

七夕の朝、稲の露を頭かけると髪がきれいになるといわれ、早朝に水田で稲露を浴びたり、川で水浴びをする人もあった。牛馬も川に連れて、キュウリの蔓つるをタワシ代りにして洗った。

仏具もこの日に磨いた。仏具磨きには、田植えのあと、荒神さまに供えてあった早苗（三束）を用いた。

子どもが生まれると、長い紙の七夕飾りをつくる家もあった。上部に錦絵がつき、下に「奉二星牛女一年二渡」と漢詩の一句などを大書し、子の名を書いて床の間につるす。終ると巻きとって保存し、毎年、七夕に飾った。七夕に伐った物干竿は、ウラ（末端）から通しても、モトから通してもさわりがないといわれた。

盆

盆のまえに墓掃除をし、竹を切って竹筒の花立てや線香立てを用意する。

七月一三日（現在は新暦八月一三日）の夕方、墓地へ精霊さまを迎えにゆく。仏壇には、盆ダゴ・そうめん・タラの酢あえ・タラのオサ（内臓）の煮しめなどの料理を供える。

夜は集落の初盆の家に参る。初盆の家ごとに、ツボ（庭）で供養の盆踊りをする。羽野や用松の男の子は、盆綱（しめ縄状のひき綱）を引いて回った。

精霊さまは、「芋ン葉でダゴを包み、芋根の毛で結び、ササゲをオーコ（担い棒）にして二ノーチ（荷なつて）帰る」といわれ、仏壇には茎や葉のついた里芋や、ササゲなどを供える。

一五日の夕方、精霊さまを墓地に送ってゆく。

八朔^{はっしやく}の節句

旧暦八月一日が八朔の節句で、田にお神酒をあげて「作ほめ」をする。水口などにお神酒を流し、「お陰でりっぱにでちよる」とほめる。

氏神さまで神事があり、お籠りなどをするが、現在は新暦の九月一日に行くところが多い。

ミーグンチ（ミーグニチ）

旧暦九月一三日はミーグニチと呼び、唐芋・栗・枝豆をゆがいて名月に供える。

ミーグニチの供え物は、無断でひいてもよいとされていたので、子どもたちは近所にひきにいった。

クンチ（クニチ）

旧暦九月がクンチの月で、用松クンチは一五日、羽野クンチは二五日などと、クンチの日は集落ごとに異なる。道ばたには、集落ごとに幟^{のぼり}が立つ。

当日は氏神さまで神事があり、前夜にはヨド相撲などがある。どの家でも栗を入れた赤飯を蒸して、他村の親類などに配る。クンチ客を招いて、鶏のガメ煮や鯖ズシなどの料理で客人をもてなす。



クニチの幟

クニチは供日とか宮日とかあてて書くが、「重陽^{ちやうよう}の節句」の九月九日の祭がクニチと呼ばれ、これに由来しているといわれている。

ヒボトキ (紐解き)

旧暦十一月五日。子どもが三歳になると、ヒボトキ祝いをする。嫁の実家から着物や帯が贈られ、これを着せて大原神社に参る。

甘酒祭り

甘酒祭りは旧暦十一月で、祭りの日は集落ごとに異なっていた。戦後、ひと月遅れの新暦で行ったりするうち、いつか廃れて祭りの日がわからなくなった地区も多い。

甘酒祭りは、各戸で必ず甘酒をつくった。清水町の養面寺地区は十一月二〇日で、この日天満宮に参り、甘酒を少量、ツバキの葉に垂らして供えた。甘酒祭りには、他地区の親類をお客に招待し、また他地区にも招かれていった。

甘酒は、甘酒麴(こうじ)でつくる。麴は各戸でネセ(米飯に麴菌を入れる)ていたが、後には業者から買うようになった。

針供養

二月八日は針供養。針仕事は女の欠かせない仕事だが、この日はふだん使う針を豆腐にさして休ませ、針の供養をする。

冬至

ボブラ(南瓜)を食べる。この日にボブラを食べると、中風や流行病にかからぬといわれる。

三 盆踊り

盂蘭盆(うらな)の夜には、いまでも多くの町内で盆踊りの輪ができて、口説きや、にぎやかに囃す踊り子の声が響く。

三花地区の盆踊りが、いつごろ始まったかは、はっきりしない。廣瀬淡窓の『懷旧樓筆記』には、幼いころ(天明六年・一七八六)に魚町(現・豆田町)で見た盆踊りの記述があるので、天明のころすでに盆踊りを踊っていたことがわかる。同様に、当時の三花地区の村々でも、このころすでに盆踊りを踊っていたのであろう。

三花地区の踊りは、音頭とりが傘をさして床縁(とこえん)(縁台)のうえに立って口説き、その周りを、踊り手はうちわを持って、踊りながら回るのがふつうである。伴奏に太鼓を使う地区もあるが、財津のように用いないところもある。

日田の盆踊りは、踊り子が手にしているうちわを踊り

の手ぶりに合わせて、いっせいに打つ仕組みになっている。うちわを打つ音がリズムを生むので、元来うちわを持って踊る大分県北地方の盆踊りは、太鼓を用いなかったようだ。

踊りは、盆の一三日の夜に初盆宅を回って踊り、初盆宅が多いときは、一四日の夜にも踊っていたが、最近は大分県や学校の校庭などで、まとめた形で踊る町内が多くなった。

もともと、盆踊りは、それぞれの地区の青年が中心になってつづけられていた。それが昭和三〇年代後半からの経済成長期に入ると、地区に残る青年が激減し、盆踊りの続行が難しくなってくる。

そうしたなかで、伝統の踊りを絶やすわけにはいかないと、壮年会や自治会がひき継いでつづけられているのが現状だ。

踊り始めは「坪借り」

日田の盆踊りの口説きは、七七句形の繰返しが多く、題材を説経節・浄瑠璃・歌舞伎などからとったものや、義民口説きのように日田で起きた事件を口説きにしたもの

もある。

初盆の家での踊りはじめは、その家の坪（庭）を借り「坪借り」からはじまるのがふつうで、最後は、「こんな口説きもまずこれまでよ」で終わるのが多い。

「坪借り」は、どの地区もだいたい似ており、次のような口説きである。

今宵一夜の 坪貸しなされ
床を一枚 傘（からかさ）ひとつ

盆踊りの由来に詳しい宿利博幸氏（岩美町）の調査によると、日田で最初の「坪借り」が口説かれたのは明治四〇年ごろで、東有田の岩下（岩美町）でつくられ、広まるとされる。三花の盆踊りが、いまの形を備えたもの、このころからではなからうか。

盆踊りの主役は、踊りの音頭をとるか口説き手で、どの町内にも声がたち、節まわしのうまい何人かがいる。

むかしは、口説き手のそれぞれが得意とする口説きを持ち、その人の十八番としてものではやされた。それらの人は、早朝から牛をひいての朝草切りや、干草切りの道

みち、得意な節まわして朗々と口説きながら野道を往復し、練習に励んだという。

県内の盆踊りの種類は一〇〇種にちかく、「さえもん・団七踊り」は全県下に広く分布している。また、「マツカセ・ヤンソレ・六調子・ばんば踊り」などは、三光村や本耶馬溪町など県北の地区で多く踊られており、三花地区の盆踊りは、県北からの影響を多くうけたと思われる。

同じ踊りを長くつづけていると、たまには替えてみたくもなるようだ。財津では、大正時代に山国^{やまぐに}(町)へ仕事にいった人が、その盆踊りを習ってかえり、新しくとり入れたといわれる。また、竹の棒を打ちあわせて踊る「団七踊り」も、五馬^{いづま}(天瀬町)あたりから入れたようだ。

新しい踊りをひとつ加えると、古い踊りをひとつ捨てることになる。こうしたことは、財津にかぎらず、日田の各地で広く行われたらしい。

藤山では、守実(山国町)あたりに多い「米つき踊り」を踊ったところもあるというが、これは動きが激しくつかれるので、いつか踊らなくなっている。

閻魔さま踊り^{えんま}

「閻魔さま踊り」で知られる龍川寺の盆踊りは、盆の一六日の夜に行われる。

陰暦一月一六日と七月一六日は、閻魔王の斎日で、地獄の釜のふたが開く日とされ、信徒はこの日に閻魔堂に参る。

閻魔参りの日に踊るので、閻魔さま踊りと呼ばれるのであろうが、いつごろ始めたものかわからない。

大正末期のころ、踊りがしだいに廃^{すた}れてきたので、なんとか盛んにしたいということで仮装をするようになった。一時は仮装コンクールをするなど、お互いに奇抜な仮装で競いあい、これが大いに受けて閻魔さま踊りがいつそう知られるようになり、遠方からの見物人もふえてにぎわった。

戦後になって、壮年が受けもつようになったころにも、仮装を復活させている。

仮装は意外性をねらうので、扮装は踊りの当日まで他人には隠して知らせない。踊りがはじまったら、破れた古着をつけ、泥で顔や手足を汚して格好をつけたホイト

(を食)が、五、六人も見事にそろっていたなどの話もある。

団七踊り

閻魔さま踊りでは、「団七踊り」がよく知られている。長短の竹の棒をリズムカルに打ちあわせて踊るこの踊りは、音響の効果もあって見る人の興味をそそる。だが、団七踊りは、多くの地区で踊られなくなって久しいという。

理由は、内容が姉妹の父の仇討ちであり、盆の供養踊りには向かないということだ。財津でも、初盆の家では踊らず、閻魔さま踊りにだけ踊っている。

踊りの由来は、寛永のむかし、奥州仙台藩のできごととされる。百姓の父とふたりの娘が田の草取りをしていて、誤って代官志賀団七に泥をかける。怒った団七によって父は手討ちに遭うが、のち、娘の姉妹が父の仇を討つというものだ。

踊りは前・中・後ろと三人で組み、これは娘ふたりが団七をはさんだ形だ。それぞれが刀と薙刀なぎなたを模した長短の竹の棒を持つ。踊りは、前が刀、後ろが薙刀、中の団七だけが両手に刀を持った形で、それを互いに打ちあわ



夏まつり盆踊り大会での「団七踊り」(昭和 55 年)

せながら踊ってゆく。

昭和五四年にはじまった「夏まつり市民盆踊り大会」では、団七踊りが市民に広く披露されて人気をよんだ。大原グラウンドに組まれた特設やぐらを囲んで、大きな踊りの輪ができ、全員での団七踊りは、なかなかの壮観であった。

このとき、財津町から壮年の数名が指導にゆき、財津町壮年は、このあと五年間つづけて盆踊り大会に参加し



「団七踊り」を描いた夏まつり用うちわ

ている。

最近では盆踊りとしてより、郷土芸能として見直され、小学校の運動会や、高校の文化祭などで演じられることもあるという。

義民口説き

延享のむかし、重税に苦しむ農民を救うため、岡田代官の更迭を求めて江戸にでて越訴^{おっそ}し、のちに処刑された穴井六郎右衛門らの墓は龍川寺の境内にある。

そうした縁^{ゆかり}から、六郎右衛門の義拳をたたえる「義民口説き」がつくられて、閻魔さま踊りのなかで踊られ、供養がつづけられている。

詳しくはわからないが、義民口説き（別掲）は龍川寺の先代、賢龍和尚の作と伝えられている。

口説き

前に述べたように、盆踊りは「坪借り」からはじまり、踊りにつれて、口説き手はつぎつぎに声つきをしていく。

「坪借り」や声つきをするときの「渡し文句」などには、だいたい決まった型があるので、代表的なものを挙げて

みよう。

坪借り

東西東西 東西東西

東西南北 お御免なされ

聞けばこの家は ○○様の

お果てなされし 初盆そうな

初の盆とて 淋しゅうござろ

村の若い衆 お女中の方が

盆の供養に 手踊りなざる

今宵一夜の 坪貸しなされ

床を一枚 傘（からかさ）ひとつ

水を片荷に 柄杓をそえて

貸して下され お願います

アーラ嬉しや 坪借りだした

（以下略）

渡し文句

こんな口説きも まずこれまでよ

だれかどなたか 声つぎ頼む

だれというても 名指しはできぬ

右は当町 壮年様よ

アーラ嬉しや 音頭さんがみえた

年の頃なら 二十と五、六

とてもお上手な 若音頭さんよ

こんなお方に 末長う頼みや

末は益々 御繁昌なざる

受取り文句

おっと合点 受取りました

先の音頭さんは 京都か江戸か

京じゃ一番 お江戸じゃ二番

あんなお上手の 流した末を

わしがようなる おろかな者が

あとをつぐとは おそれながら

何かひとつは 流してみましょ
流しかけて もし流れねば

神や仏に 雨つゆ貰ろて

水の出はなで 流してみましょ

下手な口説きも 先ず国からよ

口説き文句は、三花の各地区ともほぼ似たようなものである。その代表として、財津町の盆踊り口説きを挙げる。

ばんば踊り（日田義民口説き）

東西東西 東西東西

（ハヨイヨイ）

東西南北 おごめんなされ

（ソリヤ ヨーイヨーイ ヨイヤナ アレワイ

サッサノ コレワイサ ヨーイトナー）

聞けばお宅は お初の盆と

財津若い衆 年寄り子供

みんなそろって 踊りに来たが

うちにござるか ご主人様よ

しばし間の 坪貸しおくれ

坪はたしかに 借り受けました

それじゃぼつぽつ 文句にかかろ

鮎は瀬に住む 鳥や木に宿る

人は情の 下にぞ住める

頃は延享元年のころ

続く飢饉で 民百姓は

食うに食えなく 飢え死に続く

かてて加えて 代官岡田

慈悲も情も わきまえぬ人

無理な上納 取りたてまする

これに堪えかね お庄屋達は

役所つめかけ 陳情すれば

籠に入れられ 水責め火責め

この世ながらの 地獄の責め苦

国は乱れて 忠臣出ずる

貧の家には 孝子が育つ

馬原庄屋の 六郎右衛門

次男要助 惣次の三人

訴状認め 直訴の旅へ

(中略)

悪にたけたる 代官岡田

延享三年 極月の末

三人帰るを 待ちぶせなして

これを捕えて 拷問非道

是非もたださず はりつけとなる

龍ヶ鼻なる 麓の寺の

水誉上人 あわれみ給い

時を偽る 役人共に

義民三人の 命は消える

されど義民の 誠は消えず

今も線香の 煙は消えじ

日田の義民と 世にうたわれて

永久に輝く ああ日田義民

二つ拍子 (鈴木主水)

ア下手な口説きに 合うかは知らぬ

ア合うか合わぬか 二声三声

(ア ヤンソレナー ヤンソレナー)

みんな受け手は よろしく頼む

それじゃぼつぼつ 文句にかから

花のお江戸の その町にても

さても珍し 心中話

みんなどなたも 願いがござる

ここの亭主が お茶出すそうな

お茶も飲まれよ 煙草も吸われ

あとはよろしく お願いします

さえもん (目連尊者)

みんなナーサー コリヤ

どなたも踊りを やるかホホンホ

(ヨイト サツサト)

今のナーサー コリヤ

はやりの目連尊者 (サノエー サノエー ヤット

ヤンソレサー ヨイショ ヨイショ)

それじゃぼつぼつ 文句にかから

ここに語るは 孟蘭盆経よ

心定めて これ聞き給え

国を申さば 中天竺の

マカダ国なる その靈地にて

釈迦のみ前の そのおん弟子に

先ずはその一 目連尊者

なんて跋難 バツナン その惡龍が

須弥 スミ の山をば 七重に巻いて

雲を吹き立て 暗闇となし

虎を吹き出し 火焰を吐いて

人を悩まし 病を起こす

そこで目連 おろち 大蛇となりて

(後略)

団七踊り

アやろうな やりましような

踊りをやろうな

(ハー ヤンソレサツサノ ヤンソレサ)

今もはやりの 団七踊り

頃は寛永 三年のころ

御領分なる 坂東の村よ

坂東の村にて 百姓ござる

百姓その名は 与太郎というて

娘二人を もうけてござる

姉の宮絹(宮城野) 妹のしのぶ

親子三人で 田の草に出る

その日が悪日で 坂東の村を

志賀団七 通るを知らず

妹しのぶが 取りたる草を

道に投ぐれば 志賀団七の

肩にかかりて 大いに怒る

みんなどなたも 願いがござる

こんな口説きも まだ先や長い

わしが覚えも まずこれまでよ

後はよろしく お願いしましょ

六調子(お清口説き)

ア国は柳川 吉野の町よ

(ハー ヨーヤセ ヨヤセ)

お吉殿とて 米屋がござる

一人娘に お清というて

年は十六 花ならつぼみ

なれどお清は 因果なものよ

神に心願 仏に所願

あそや山にも 参らにやならぬ

参る同行が 六人できた

今日は日もよし 旅立ちしましょ

脚絆みそ足袋 その武者わらじ

家を出るときや いと花やかに

小唄歌うて 我が家を出行く

道の道中を 尋ねて聞けば

みんなどなたも 願いがござる

こんな口説きも まだ先や長い

だれかどなたか あと継ぎゆ頼む

早くござれよ もう早よござれ

早くござらにや 音頭が切れる

音頭切れば 供養にやならぬ

アーラ嬉しや 音頭さんが見えた

あいの傘(からかさ) 手拍子で渡そ

第二節 伝承の咄^{はな}し

一 彦山の開祖―藤山の恒雄

六世紀のはじめの頃、中国の魏^ぎの国から、善正という僧が、筑紫へ渡つて来た。

見たところ、この地にはまだ仏教が伝わっていないらしい。善正は、たいへん残念に思つて、みずからありがたい教えをひろめて、人々を仏の道へ導こうと心に決め、落ち着きの場所を求めてあちらこちらとめぐり歩いた。

やがて、雲の間に高く聳^{そび}える英彦の山にたどりついて、見れば、峰々は深く静かに、谷は水美しく、いかにも清く尊^{そん}げな土地である。

これこそ霊場にふさわしいと、この地に杖を留めることにし、岩窟を探して、居を定めた。

こうして、身には葛^{かすら}をまとい、木の実を摘んで口に入れ、ひたすら仏に祈つて、行いすまずこと一六年。

その頃、藤山の里に、恒雄という若い男があつた。

生まれながらに気性が荒く、小さいうちから、弓矢を執^とつて鳥獸を狩りするものが、何よりも好きだった。

あるとき、いつものように獲物^{えもの}を追って山に入った恒雄が、ずっと奥深く踏み登っていくと、

岩窟の中に、不思議な人影を見かけた。

髪も髭^{ひげ}も伸び放題に乱れて、痩せこけた身体に木の葉の衣をまとい、眼光だけは鋭い。

こんなところで何をしているのか、問うてみたが、善正はまだ日本のことばを知らず、恒雄のいうことがわからない。

善正は恒雄のいでたちから察して、生きものの命を奪うのは、たいそう罪深いことだ、と諭^{さと}したが、恒雄にもまた善正のことばがわからない。

それでも、善正の気高い様子に、何となく心をひかれた恒雄は、その後も獵のたびに、かならず訪れては、食べ物を届けたり、身のまわりの手助けなども、するようになった。



そのうちに、ことばもお互いに少しずつわかるようになり、善正は、いよいよねんごろに、殺生の戒めを説いたが、こればかりは恒雄も頑として、聞こうとしなかった。

さて、ある朝、恒雄の眼の向うを、白いものが過^よぎった。

鹿だ。

輝くばかりの真っ白い鹿が、雄々しい角を振って、歩いていく。

これぞ、よい獲物――。

弓を構える間ももどかしく、矢を放つ。矢は空を切って、見事に鹿の背に立った。

鹿は、ぼーん、とひと跳ね、矢を負ったまま翔び去った。

恒雄も、遅れじ、と追う。

きて、ばたり――と倒れた。どれくらい走ったか、鹿はやがて力つ

きて、恒雄が駈け寄るより早く、傍^{かたわ}らの檜の茂みから、鷹が三羽、姿を現わした。

鷹たちは、なつかしげに鹿に寄り添い、一羽は鋭い嘴で矢を抜きとり、一羽は翼をひろげて、傷を撫でた。残る一羽が、谷川の水を檜の葉に含ませて来て、飲ませると、鹿は目を開け、息を吹き返し、起き上がったかと思うと、勢いよく走り去った。

鷹たちもまた、いずこともなく、飛んで行った。

目をこらして始終を見ていた恒雄は、あまりの不思議に、声さえも出なかった。

我に返ってから、

まさしく権現神のお示しに違いない。

そう思うと、弓を捨て、矢を折り、いっさんに善正の許に走って、その前にひれ伏して、罪を悔い、仏弟子とならんことを乞うた。

善正はその志をあわれみ、忍辱にんじよくという名を与えた。

忍辱は善正に従って、日も夜も仏法を問い、教えを受け、師とともに一つの道場を建てて、善正の持仏を安置し、靈山寺と称よんだ。

忍辱はここで、酒肉を口にせず、布を身につけず、苦行精進を重ねた。

善正は日本に在ること二〇年あまりで、後を忍辱に託

して、魏の国へ帰っていった。

後世、忍辱上人は彦山開祖の一人として、崇められ、恒雄の狩獵の姿を青銅で造り、祠を建てて祀られている。

二 山童（やまわろ）になつた子ども

むかし、伏木村のこと。

ある夜、四才の男の子が泣いていた。親がいくらなだめ、すかしても、ただいっそう泣き叫ぶばかり。

困り果てた母親が、

そんなに泣くなら、化けもんになつてしまふぞ——と、外に放り出した。

そのまま戸を閉めて、様子をうかがっていると、しばらくは大きな声で泣き続けていたが、やがて、急に泣き声が遠ざかっていく。道を越え、まるで宙を飛んで行くようだった。

様子が怪しいので、父親と走り出てみたが、子どもの姿は、どこにもない。驚いて、声の飛んだ方向へ追って行ったが、既に泣き声は、はるかのかの山を越えて消え去った。

近所の人も騒ぎを聞きつけて、松明^{たいちり}を手に手に、鐘や太鼓で探し廻ったが、見つからぬ。

翌日も翌々日も、村中総出で八方手を尽くしたが、杳^{よう}として行方は知れなかった。

両親は、つまらぬ叱り方をしたばかりに、かわいい子を、と悔やんだが、後の祭り。その日を命日として、泣く泣く弔いをした。

それから二〇年程経った頃、村の三人が旅の帰りに、玖珠の山中で、ちょうど昼刻になったので、弁当を開いた。

すると、かたわらの繁った芒叢^{すすきむら}の中から、ぬうつと現れた者がある。

三人はびっくりして、見ると、髪はぼうぼうで髭黒く、全身は洪紙^{しげ}のよう、背中に青苔まで生えた、大男。

三人がぶるぶる震えているのを、じろりと見やって、云うには

それは飯だな。おれにも一つ、くれ。——おずおずと、弁当^{べんとう}行李をさし出すと、ひったくるように取って、久し

ぶりの飯だ、とむしゃむしゃ平らげてしまった。そして、もっと寄せ、と手を出す。とうとう三人分をべろりとやって、さて、

うまかった。お前たちはどの者だ。と尋ねるので

日田は伏木の在でござる。

と答えると、驚いて、

わしは幼いときに、親に捨てられて、しかとは覚えぬが、伏木村の生まれじやと教えられた。一度訪ねて父母の顔も見たい、と思うが、今日は阿蘇山に使いに行くところ。帰ったら、わしのことを、よく伝えてくれ。

と云い残して、芒の中を飛ぶように去って行った。

村に戻った三人の者から、このことを聞いた両親は、急いで玖珠山中のその場所へ出かけてみたが、もとより跡形もない。

子どもが無事に生きているのが確かめられたことを、せめてもの慰めにして、戻るほかなかった。



山童^{やまわろ}という、山の妖人になって、天狗にでも使われているのだろうか、と噂^{うわさ}された。

三 用松の首なし地蔵

用松原に、立派な地蔵さまの堂がある。

竜体山鶴林寺という。

古くは、千倉のあたりにあったのを、今の地に祀ったのだという。

さて、村の分限者^{ぶんげんしや}の家に、与喜^{よき}という下男があつた。日頃から力自慢の、乱暴者だつた。

ある日、与喜は山仕事にも出かけず、のらりくらりしていて、旦那に叱^{なぐ}られた。

おうこ（担い棒）をかついで、山に登っては来たが、何ともおもしろくない。

地蔵さまの前を通りかかると、新しいよだれ掛けをしてもらつて、にこにこしてござる。

与喜はむらむらとなつて、怒鳴った。

こら、地蔵、何がおかしい——

それでも地蔵さまは、にこにこ。

えい、わしの力を受けちみい。

と、天秤棒を持ち直すや、地蔵さまの頭めがけて振り下ろした。

地蔵さまは、ぐらりと揺れて、頭がころりと、前に落ちた。

ふん。地蔵地蔵とたいそうに云うてん、たかが石じや。与喜は鼻をうごめかした。



用松の首なし地蔵尊

くに移して、お祀りした。

四 羽野天満宮の奇瑞

しばらくして、与喜がまだ山道をたどっていると、ズッシン という、とてつもない音とともに、何やら重いものが、空から降って来たような地ひびきがした。与喜は仰天した。

牛のようなでっかい石が、自分をめがけて転がってくる。宙を跳はんで逃げた。

しかし大石はどこまでも追ってくる。坂を上逃げれば上へ、下に走れば下へ、横に這えば横へ。

息も絶え絶えに、力つきて倒れかかったとき、そばの崖に横穴を見つけた。

助かった——と、飛びこむと同時に、すごい勢いで大石が、ぴたりと穴に貼りついて、蓋をしてしまった。

あわてたのは与喜。

押せど叩けど、大石は動かばこそ。大声を張りあげて、助けを求めたが、穴の中でこだまするばかり。

そのうちに、事の様子を聞きつけた村人たちが、鉋や棒を手にして集まったが、大石はやはりびくともせぬ。

ついに、村人は諦めて、閉じこめられた与喜の供養のためにもと、地藏さまの首を元どおりにつなぎ、村の近

菅原道真公が太宰府で逝去して、五十年忌にあたる天曆六年（九五二）、公の甥菅原貞光が、太宰府の天満宮と安楽寺に参詣のため、京都から下向、その帰途、宇佐八幡宮へも参向しようと、日田を通りかかった。

その夜、草場に泊った夢に、道真公が現れて、教えるのに、

この村から東北の方に、小さい丘があつて、きれいな流れのほとりに、二本の梅の木がある。厳かな感じのするところで、神が坐すのにふさわしい。そなたは、わたしの像を安置して、祀るように。

とのこと。

明けるのを待つて、探してみると、果してその通りの所があつた。

そこで道真公より伝わった、法華経と地藏経とを御神体にして、社を建て奉った。

これが羽野天満宮である。

時代が移って、江戸初期の明暦元年（一六五五）頃、幕府旗本、小川藤左衛門正久が、養父藤左衛門正長の後を嗣いで、日田代官に任ぜられた。

舟で赴任の途次、周防灘のあたりだらうか、一夜大風が起こって、山のような浪の中で、今にも舟は覆らんばかりとなった。

小川氏は本姓菅原で、道真公の子孫だった。

正久は、はるか九州の天満宮に、波浪を静めて、無事に着岸せしめ給え、と祈った。



羽野天満宮拝殿

すると、不思議にも、空中に声があつて、案ずるな。そなたはわたしが護つて、きつと安全に送り届けて遣わす。わたしはそなたの赴く、日田の羽野に居る。着任致したら、かならず訪うて参れ。

と云ったかと思うと、暗い波間に梅鉢の紋をつけた提灯が、ぼつかりと浮かび出て、いかにも、こちらへと指し招いているように、見える。

まさに天神の御加護と、喜び勇んで、その光に従つて、事なく九州へ到ることができた。代官として日田に臨んだ正久は、直ちに羽野に詣で、社殿を新しく建立して、厚く道真公の威徳に報じた、ということである。

五 あてン外れた千倉市

年代には諸説あつて、確定し難いが、『豊西記』の註によると、

和銅四年（七一）、日田城の鬼門にあたる、羽野村千倉に、鎮護の社を祀った。これが北辰社また靈符堂と、称した。

承保二年（一〇七五）に、郡司大蔵氏の一族永俊の息女、千倉姫が、重い病にかかつて、七才で死去した。

千倉姫は幼いながら、聡明この上なく、顔かたちも美しく、氣品があつた。

死後は、人の通り路の傍に祀つてもらつて、祈願する者があれば、苦しみを救つてやりたい、との遺言で、千倉の道路傍に堂を建て、北辰社を合祀して、千倉妙見菩薩と称した。

千倉姫は、疱瘡にでもかかつていたのか、瘡かさの病氣に効験があるといつて、



羽野に降りた千倉妙見の祠

音の同じ笠を厚紙でつくつて上げて、平癒を祈った、という。

旧の三月三日が祭礼日で、用松原から参道を比丘塚のあたりまで来ると、その付近に店が出たり、ちよつとした見世物などもあつて、近在ばかりか遠方からも多勢の参詣人があり、たいそう賑わつた。一年の農具は、すべてこの市で調えていた。

いつの頃からか、知患者があつて、千倉のような奥の方でも、これだけの賑わいだから、もつと参詣の便のよい、下の方に遷うつしたら、さぞ流行はやることだろうと、社を羽野天満宮の北隣に遙した。

ところがなんと、祭りになつても、さつぱり参詣の人が寄りつかない。儲もちけを狙つてずらりと並んだ店も、これにはあきれるばかり。あてン外れた千倉市と、笑われたそう。

あてン外れた千倉さま

ともいうが、どうしてそんなことになったのかな？

千倉さまは、昭和四二年からまた上にお戻りになつて
いるが、むかしのような賑わいは、ないようだ。

六 丈助喰い

明治の中ごろまで、小河内に丈助という男があつたそ
うな。

丈助どんは朝早くから、山に出かけて、露に濡れなが
ら、朝草を刈つた。

そして、牛の背負うような、秣の山を担いで来て、ど
しーん、と地ひびきを立てて置くと、冷たい水で顔をぶ
るぶるん。

膳の前にどつかと坐つて、かかどんの運んで来た、二
升は入ろうかという飯櫃を引き寄せると、井のような茶
碗で、ばくばく、もりもり。たちまち五、六杯。

そこへ、かかどんがあわてて、味噌汁を鍋ごと運んで
来る。そいつをお碗に注ぐのももどかしく、ふうふう、
ずるずる。これまた五、六杯

漬物が来る。ばりばり、ぽりぽり。

お茶が来る。がぶがぶがぶ。いやあ、食べた、飲んだ。
煙草を一服。

すべてこの調子。

丈助どんはたいそうな力持ちだが、食べるのも食べた。
それも、あれがいい、これはいや、というのではない。
飯もおかずもない、眼の前に出て来たものから、何で
もかまわず、片っぱし平らげて行く。

丈助喰い

村の人は、
そう云つて親
しんだ、と。



七 かっぱと小豆洗い

岡本川が花月川に流れ入るところを、馬場どん洲、という。

むかし、このあたりは、青々と澱んだ水が深く湛えられた洲になっていた。

ここには河童が住んでいて、人間が泳いでいると、足を引っぱって、水に引き込む、と恐れられた。

また、小豆洗いが出て、夜ひとり通ると、川のそばで、

ぎんしよき、しよき……

と、小豆をとぐような音がする。

あつ、と思つて聴き耳をたてると、

小豆洗おか、人どころか、ぎんしよきしよき……

と、うたうように云う。

この時、素速く耳を押さえて、駈け出さないと、たいへんなことになる、といわれた。

小豆洗いは、カワウソのいたずらだ、ともいうが、これだけでなく、あちらこちらで現れている。三和小学校

の前の菰迫でも出たという。

菰迫ではボソというものも出た。夜遅くなってこのあたりを通りかかると、土をあげせ掛けるようないたずらをされたり、だまされたりした。その時にボソボソと音が聞こえた。正体はやはりカワウソやイタチだといわれる。後脚で砂をけりかけるということだった。

八 髪掛け松

いつの頃か用松に戦いがあつた。そこへ三尾山から白馬に跨がつて駈けつけるひとりの女性。長い髪を風になびかせて、その名も髪永媛といった。巧みに乗馬を駆つて来たが、一幹の老松がそびえる所で、はたと馬の歩みが止まった。見ると、そこは崖で、下は花月川が滔々と流れている。

川向うでは戦いがまさにたけなわ。進路を失った媛は、何思つたか丈なす黒髪をぱつさり切り放ち、その老松の枝にうち掛けるや、馬腹を蹴って虚空に躍り出た。

どのような手綱捌きだったものか、馬は宙を飛んで、一間半四方ばかりの平らな岩の上に、とんと脚を着いた。

しかし鞍から離れた媛の姿は川の水に没して、再び現れることがなかった。

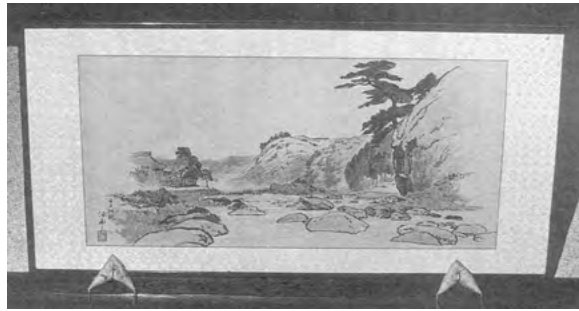
髪氷媛の「髪掛け松」

松は枯れてしまったが、住吉の娘たちは、川向うの崖面に黒く筋を引いた岩肌を望んで、黒糸を笹に垂らして供え、自分も髪の毛の長く美しくあらんことを祈るのだった。

馬の蹄の跡を残したという岩も、その後の川工事で消え失たせた。

このところにまつられて、雨乞いの祈願をこめられた八大竜王も、いま遷座されている。

付近の様子は変わってしまったが、髪永という字名は



庄野伊甫画 髪掛け松の図

この地に残り、かつての実景図は日田中学美術教師であった庄野伊甫の筆によって、地区の人の家に伝えられて、名残りをとどめている。

九 石が語る

わし石 伏木更原の最も高いところにある石。鷲がこの石の上に、翼を畳んで、休息をとりながら、兔などの獲物を狙っていた、というところから、この名がある。どこからでも見える高所から、四囲をにらみわたしている、王者の雄姿が、想いやられる。

なる石 市ノ瀬から山道を更原に、登ったところの石。大きくて硬いので、叩くとかんという音がするところから、鳴石という。

うし石（ういち） 一尺八寸山の小河内寄りにある。大きな牛が、寐そべっているように見えるので、牛石。そのあたりも、牛石山と称ばれる。この山に雲がかかると、小河内は雨になる、と云って、外にいれば跳んで帰って、広げた蓆を片づけたり、干し物を取り入れたりする。

チヨーマジぞう 財津町、国道二一二号傍らの五葉

苑裏、田の畦に、高さ一メートル足らずの石柱が傾いて立っている。むかし戦いのあったとき、後れて馳せつけた武士が、何かのわけあって自害をとげた場所とされ、その供養の碑石と云い伝えられている。雨の夜には刀の打ちあう音や馬の蹄の音がする、と恐れられる。チョーマという名はどういう意味なのか、明らかでない。

これに似た石は高瀬地区の上野や東有田地区の諸留などにもあって、道路からあまり遠くないところに据えられている。石面には何の文字もないが、ムラを邪気から



チョーマじぞう

守る塞^{さえ}の神や石敢当^{いしかんどう}のたぐいではないかと思われる。

日田どんの力石

相撲の神様とよばれる日田どん、大蔵永季が力だめしをしたという石は、三本松をはじめ市内の各地にある。羽野の南端、上手境いの水路の傍らにも、径が一メートル×八〇センチくらいの楕円形の石が坐っている。日田どんが、居館のあった鷹城山——慈眼山からぶん投げたのが跳んで来た、といっている。やはり字界の標石だったのだろうか。



日田どんの力石